
川端康成全集

第七卷

再 會

新潮社

川端康成全集第七卷

再 會



昭和四十五年一月二十五日 發行
昭和四十九年六月三十日 三刷

定價 二千三百圓

著 者 川 端 康 成

發行者 佐 藤 亮 一

印刷者 塚 田 重

印刷所 塚田印刷株式會社

原色版 半七寫眞工業株式會社

製本所 新宿・加藤製本所

東京都新宿區矢來町七一

發行所 株式會社 新 潮 社

電話東京(〇三)二六〇一一一
千一六二 振替東京八〇八番

墨丁本、落丁本は本社又はお買求め
の書店にてお取替へいたします。

第七卷
目次

雨 し 夢 反 再

の ぐ

日 れ 橋 會

.....
六三

.....
五三

.....
四三

.....
三一

.....
七

住
吉……………七七

地
獄……………八九

北の海から……………一〇一

虹いくたび……………一一七

再婚者……………三四七

再

會

再

會

敗戦後の厚木祐三の生活は富士子との再會から始まりさうだ。あるひは、富士子と再會したと言ふよりも、祐三自身と再會したと言ふべきかもしれないかつた。

ああ、生きてゐたと、祐三は富士子を見て驚きに打たれた。それは歡びも悲しみもまじへない單純な驚きだつた。

富士子の姿を見つけた瞬間、人間とも物體とも感じられなかつた。祐三は過去に出會つたのだ。過去が富士子といふ形を取つて現れたのだが、祐三にはそれが抽象の過去といふものと感じられた。

しかし、過去が富士子といふ具象で生きて來てみればそれは現在だらう。眼前で過去が現在へつながつたことに祐三は驚いたのだつた。

今の祐三の場合の過去と現在との間には、戰爭があつた。

祐三の迂闊な驚きも無論戰爭のせゐにちがひなかつた。

戰爭に埋没してゐたものが復活した驚愕とも言へるだらう。あの殺戮と破壊の怒濤が、しかし微小な男女間の瑣事を消滅し得なかつたのだ。

會

祐三は生きてゐる富士子を發見して、生きてゐる自分を發見したやうだつた。

再

祐三はあとくされなく富士子と別れたやうに自分の過去ともきれいに訣別し、その二つとも忘却しおはせたつもりで、戰爭のなかにゐたものだが、やはり持つてゐられた生命は一つしかないのだつた。

祐三が富士子と再會したのは日本の降伏から二ヶ月餘り後だつた。時といふものも喪亡してしまつたやうな時で、多くの人々は國家と個人の過去と現在と未來とが解體して錯亂する渦卷に溺れてゐるやうな時だつた。

祐三は鎌倉驛において若宮大路の高い松の列を見上げると、その梢の方に正しく流れる時の諧調を感じた。戦災地の東京にゐては、こんな自然も見落しがちに過した。戦争中から方々に松の枯死が蔓延して國の不吉な病斑のやうだが、ここの並木はまだ大方生きてゐた。

鶴ヶ岡八幡宮に「文墨祭」があるといふ鎌倉の友人の葉書で祐三は出て來たのだつた。實朝の文事から思ひ立つた祭らしく、いくさの神が世直しの意味もあつたらう。平和な祭見の入出はもう武運と戦勝とを祈願する参拜ではなかつた。

しかし祐三は社務所の前まで來て、振袖の令嬢の一群に目の覺める思ひをした。人々はまだ空襲下の、あるひは戦災者の服裝から脱してゐないので、振袖の盛装は異様な色彩だつた。

進駐軍も祭に招待されてゐる、そのアメリカ人に茶を出すための令嬢達だつた。進駐兵は日本に上陸して初めて見るキモノだらうから珍らしがつて寫眞を取つてゐた。

祐三にしても、これが二三年前までの風俗だつたとは、ちよつと信じられぬほどだつた。はじめに暗いまはりの服裝のなかで最大限の飛躍を見せた女の大膽さに感心しながら、野天の茶席へ案内されて行つた。令嬢達の表情や動作にも華美な盛装が映つてゐた。これも祐三を呼びさますやうだつた。

茶席は木立のなかにあつた。神社によくある細長い白木の卓にアメリカ兵が神妙に並んで、無邪氣な好奇心を見せてゐた。十歳前後の令嬢が薄茶を運んでゐた。模型じみた服裝と作法で、祐三は古い芝居の子役を思ひ出した。

さうすると大きい令嬢の長い袖や盛り上げた帯が今の時代に錯誤し矛盾した感じも明らかとなつて

來た。健康な良家の子女が身につけてゐるので、かへつてなほ妙にあはれな印象を受けた。

けばけばしい色彩や模様も今かうしてみると俗惡で野蠻だつた。戦前の着物はつくる者の工藝も着る者の趣味もここまで墮落してゐたのだつたかと、祐三は考へさせられた。

後で踊の衣裳と見くらべてこれを一層強く感じた。社の舞殿で踊があつたのだ。昔風の踊の衣裳は特別のもの、令嬢達の服裝は日常のものだらうが、今は令嬢達の盛裝も特別に見物すべきもののやうだつた。そして戦前の風俗ばかりでなく女性の生理までが露骨に出てゐるのだつた。踊の衣裳は品があり色も深かつた。

浦安の舞、獅子舞、靜しづかの舞、元祿花見踊——亡び去つた日本の姿が笛の音のやうに祐三の胸を流れた。

左右に分れた招待席の一方が進駐軍で、祐三達は大公孫樹たいこうそくじゅのある西側の席にゐた。公孫樹は少し黄ばんでゐた。

一般席の子供達が招待席へ雪崩れこんで來た。子供の群のみじめな服裝を背景として、令嬢達の振袖などは泥沼の花のやうだつた。

舞殿の赤い柱の裾に杉林の梢から日がさしてゐた。

元祿花見踊の遊女らしいのが、舞殿の階をおりたところで、あひびきの男と別れて立ち去る、その裾を砂利に曳いてゆくのをみると、祐三はふと哀愁を感じた。

綿で圓くふくらんで、色濃いい絹の裏地がたつぷり出て、花やかな下着をのぞかせて開いた、その裾は日本の美女の肌のやうに、日本の女の艶めかしい運命のやうに——惜しげもなく土の上を曳きずつてゆくのがいたいたしく美しかつた。華奢で無慙で肉感の漂ふ哀愁だつた。

祐三には神社の境内が靜かな金屏風のやうになつた。

靜御前の舞の振は中世的であつて、元祿の花見の踊は近世的なのだらうが、敗戦間もなくの祐三の目は踊のやうなものに抵抗力を失つてゐた。

さういふ目で舞姿を追つてゐる視線に、富士子の顔があつたのだ。

おやと驚くと祐三はかへつて瞬間ぼんやりした。こいつを見てゐるとつまらないことになるぞと内心警戒しながら、しかも相手の富士子が生きた人間とも自分に害を及ぼす物とも感じられなくて、直ぐには目をそむけようとしなかつた。

舞衣の裾の感傷は富士子を見た途端に消えたが、それほど富士子が強い印象なのではなく、失心した人が意識を取りもどした目に寫る物のやうであつた。生命と時間との流れの繼目に浮んだもののやうであつた。そして祐三のさういふ心の隙に、なにか肉體的な溫かさ、自分の一部に出會つたやうな親しさが、生き生きとこみあげて來た。

その富士子の顔もぼんやり舞姿を追つてゐた。祐三には氣がついてゐない。祐三は富士子に氣がついてゐるのに富士子は祐三に氣がついてゐないことが、祐三は奇妙な感じだつた。さうすると二人が十間と離れないでゐながらお互ひに氣がつかかなかつた時間は、更に奇怪なことに思へた。

祐三がなんの顧慮もなくつきに席を立つて行つたのは、富士子の無力にほうけた顔つきのためかもしれない。

祐三は失心しさうな人呼びさますやうな氣組で、いきなり富士子の背に手をおいた。

「ああ。」

富士子はゆつくり倒れかかつて來さうに見えて、しゃんと立つと、體のびりびり顫へるのが、祐三の腕に傳はつた。

「御無事だつたのね。ああ、びつくりした。御無事でしたの？」

富士子は體をかたくして立つてゐるのだが、抱かれに寄り添つて來る感じを祐三は受けた。

「どこにいらしたの。」

「ええ?」

今の踊をどこで見てもたのかとも聞え、富士子と別れて戦争中どこにゐたのかとも聞え、また祐三にはただ富士子の聲とも聞えた。

祐三は幾年ぶりかで女の聲を聞いた。人ごみのなかにゐるのを忘れて富士子と會つてゐた。

祐三が富士子を見つけた時のなまなましさは、富士子から強められて祐三に逆流して來た。

この女と祐三が再會すれば道徳上の問題や實生活の面倒がむし返されるはずで、言はば好んで腐れ縁につかまるのだから、さつきも警戒心がひらめいたのだが、ひよつと溝を飛び越えるやうに、富士子を拾つてしまつた。

現實とは彼岸の純粹な世界の行動のやうで、しかも束縛を脱した純粹な現實だつた。過去が突然こんなに現實となつた経験はなかつた。

新膚にひだの感じが富士子とのあひだにふたたびあらうとは夢にも思はなかつた。

富士子も祐三を責めとがめる様子は微塵もなかつた。

「お變りにならないわねえ。あなた、ちつともお變りになつてらつしやいせんわ。」

「そんなことはない。大變りだよ。」

「いいえ。お變りになつてないことよ。ほんたう。」

それが富士子の感動らしいので、祐三は、

「さうかねえ。」

再　　會
「あれから……ずうつとどうしてらしたんでせう。」

「戦争してたさ。」と祐三は吐き出すやうに言つた。

「うそ。戦争してらしたみたいぢやないことよ。」

側の人達がくすくす笑つた。富士子も笑つた。まはりの人々は富士子の邪魔にならないやうだつた。思ひがけない男女の邂逅を見る人達はむしろ好意で明るくなつてゐるらしかつた。富士子は周囲の空氣にもあまえかねない風だつた。

祐三は急にきまり悪くなると、さつきから氣づいてゐた富士子の變りやうが一層はつきり目について來た。

小太りだつたのがげつそり瘦せて、切の長い目ばかり不自然に光つてゐた。富士子は赤毛の薄い眉に以前は少し赤みがかつた眉墨を引いたりしてゐたが、今はその眉墨もなく頬紅もかすかなので、頬の肉がさびれたのに、平べつたい顔が見えた。白い肌が首から上はやや黒ずんでゐる、その素顔が出て、首の線の胸の骨へ落ちるところに疲れがたまつてゐた。毛筋の細い髪 of 器用な波も怠つて頭が貧相に小さくなつた。

祐三に會つた感動を目だけで懸命に支へてゐるやうだつた。

以前氣になつたほど年齢の差が感じられなくて、祐三はかへつて安穩な不便を催しさうなものなのに、若々しいときめきが消えないのは不思議だつた。

「お變りにならないわ。」と富士子はまた言つた。

祐三は人ごみのうしろに出た。富士子も祐三の顔を見ながらついて來た。

「奥さまは……？」

「……………」

「奥さまは……？ 御無事？」